

「会員短信 10」

「長塚節」 久松久子

私の故里は、茨城県結城郡石下町（現在の常総市）である。関東平野に唯一の筑波山を掲げ田畑が広がり、清流の鬼怒川を挟んで向う岸は、小説『土』で有名な長塚節の生家がある。昔は岡田村国生（こつしょう）と言っていた。

明治三十三年、節が正岡子規を尋ねた時の逸話は今も話し継がれている。初めて訪問した日は先客があって気後れし、翌日に再度訪問して面会となる。更に三日後に訪問した際には、子規に「線香が燃え尽きるまでにここの実景を詠め」と言われて、「歌人の竹の里人おとなへばやまひの牀に絵をかきてあり」に始まる十首を作り、この一連の歌は、新聞『日本』に掲載され、節は感激するのである。以後、子規の愛弟子として活躍しながら全国各地を旅するようになったが、私の実家には旅姿の節のセピア色の写真が掛かっている。

長塚家は豪農で、父は県会議員を務めていたが、節は炭焼きの研究や堆肥の改良など農村振興にも努めている。農民文学の名作とされる小説『土』は東京朝日新聞に掲載されたが、世に出すべきだと奨めてくれたのは、夏目漱石だった。

明治四十四年に喉頭結核と診断されてからも各地を旅しながら多くの歌を残し、大正四年、九州の病院で三十六歳で亡くなる。

白埴（しらはに）の瓶こそよけれ霧ながら

朝はつめたき水くみにけり 節

薬包紙に詩歌びつしり節の忌

久子